音楽リズムを主にした保育

今野久子

今年の四月、二年保育の一年児の子ども達を受け持った私は、前年度受け持った一年保育の子ども達の社会性、音感などに比べてはなはだ幼稚であることにとまどった。

特に音楽リズムに関しては、皆で声を揃えて歌うことができない子、自分の音程の間違いに気付かない子、オルガンの早さが分らず自分のペースで歌う子、メロディーとそれに付く歌詞が合わない子などであった。それは「すずめの学校」「はとぽっぽ」のように、理解し易く家庭で楽しく歌っていた歌さえ声を合わせて歌えない状態だし、更に訓練されていないために、音楽に合わせて歩くこともできなかったのである。

この状態を見て、私は音楽リズムを主体にした保育をして、未発達な子ども達がどこまで成長するかみようと考えた。

四月、この時に嫌いになったり、劣等感を持ったりすれば、私の一年間の方針から離れてしまうので、まず皆で楽しく歌えるように、一番身近な母親から教えられた歌「指遊び」「結んで、開いて」「三つのお顔」などを歌わせた。更に上半身を動かして、体でリズムを受け取ることに誘った。

また、今までは楽器に合わせないで歌っていたのを、オルガンでメロディーだけを弾いてやり、それに合わせて歌わせた。

一か月も過ぎた頃から、家庭では聞かれなかった歌、朝と帰りの歌や生活指導の歌など、どれも八小節位の歌を選んで歌わせた。これらの歌は身近に感じるものばかりなので、喜んで覚えて歌った。その頃、特に歌われた歌は「三つのお顔」であった。園の玄関で泣く子があったが、その度に子ども達の中からこの歌が出てきた。また、ぽつぽつ園の生活にも慣れてくるにつれて、他人を批判する目もできてきて、友達のそばに行き、手を指さして、「きれいですか。お手々」と「きれいですか」の歌を歌う光景がみられるようになった。そこで私は、子ども達が喜んで歌う歌は、おとなが美しいと感じるようなものではなく、まず自分自身に直接感じるようなものであり、それでなければ覚えようとする意欲が生まれない、とはっきり意識したのであった。

だんだんクラスの中で、黒板の前で、積木をしながら、砂遊びをしながら、おままごとをしながら、ブランコやシーソーに乗りながら、それに合った歌が聞かれるようになった。

リズムの指導には、最初、戸倉氏の本の中から、4分の4の四小節の曲に簡単なことばのついているものを選んだ。「歩く、4分の4」「ランニング、8分の4」「スキップ、4分の4の付点」この三つの小曲を使って、三つの動作を教え、リズムを理解させ、更に曲を聞き分けて動作をするようにさせた。これは子ども達がとても喜び、ときには催促するようになった。ここで三つの動作を習得した子ども達は体でリズムを表現するのが嬉しくってたまらない様子であった。

次に休符のリズム「4分の4、二つ歩いて二つ休み、三つ歩いて一つ休む」「四分の3」「4分の2」などをした。更に休む所にカスタネットを用いた。また、音符の長さについては、戸倉氏の同じ本から「全音符、ライオン、ウォー」「二分音符、もちつき、ペッタ

ン」などをした。これは動作とことばがおもしろいので喜ばれた。これらは短いものなので、ちょっとした時間にできるので都合がよくできた。

自由表現では失敗した。あくまで子ども達自身に創造させるべきだったのを、初めに二、三の動物を表現して見せたため、今になってもその動物は同じ型のままである。しかし、子ども達自身の表現は同じままではなく、いろいろと工夫されて変っていった。これは園の近くに動物園があるためだと思う。これのための曲は子ども達の知っている「むすんで開いて」の動作から「その手を」で動物のまねをさせ、その動物に合わせて高音部、低音部を弾いた。この段階に至った子ども達は入園当時のおもかげはどこへやら、元気一杯リズム遊びをしている。

夏休みが終った頃には、精神的にも成長して独立心が芽ばえてきた。同時に音楽リズムに対しても自信が出てきた子ども達は歌もリズムのはっきりしたもの、テンポの速い曲を好むようになった。

「ひとりで歌わせて」という子どもが出てきたのが機会で、のど自慢が始まった。恥かしくて歌えない子どもは隣りの席の子と一しょに歌っているうちに、誰でもが先を争って歌うようになった。審査員は子ども達だったので一人ひとりが本当に楽しそうに、伸び伸びと歌った。上手下手にこだわらず精一杯歌って一人ひとりが自信を持つようになった。このことは私にとってもチャンスだった。それは一人ひとりの声を知ることができたからである。それで一しょに歌っている時、歌っていない子、間違って歌っている子がわかるようになった。

その頃は、歌や動作にカスタネットを入れる訓練が、耳で聞きながら手（カスタネット）と足を同時に使えるまでになった。このようにリズム感を把握することができた子ども達は小節の長い歌、更には物語りになっている歌（大中寅二作、山びこ「ぼくの仔馬」）、またリズムゆうぎも長いもの（則武氏の本から「ゆうえんち」）までも消化できるようになった。次にリズム遊戯の曲だけを使い、曲を弾きながら「噴水ですよ」「ブランコですよ」「ボートですよ」などと言って、自由表現をさせた。これはいろいろの表現が生まれた。その中でいいものを子ども達に選ばせた。

幼児を円満に発達させるために、幼稚園生活ではかたよらないいろいろの経験を与えて指導する。

いろいろという中の一つの役割を持っているものが「音楽リズム」である。それだけにその指導の根本の気持は〝楽しく、そしてその中で基本的なものを身につける〟ということである。子どもはどこまでも楽しくやっているうちに、自然に教師の計画した目標に達していくので、そこには少しの無理があってはならない。そこで、時折使われている「訓練」ということばがそういうかたよりを持たないものであることを希望する。

具体的な指導法については、

- 幼児の身近なものから材料を選んで扱った
- 音楽リズムを身体そのものを通して受け取るように扱った
- 音楽リズムの経験を多くもたせた

これらのことによって、聞き馴れないオルガンにあわせる、ということに大した抵抗も感じないで入れたし、普段の生活の中から気軽に歌が生れてくる、という場面があらわれてきたことと思われる。

初歩的な扱いについては、十分にその時期の幼児の状態を考慮していると思われるので、失敗したと書かれている「自由表現」も環境もよいことであるし、ほんのちょっとした工夫でぬけ出せることと思う。(M)

て、まとめたものを敬老会に発表させた。子ども達は自分達で作ったものだけに自信満々で、お年寄り共々に、喜んで、楽しくリズム遊戯ができた。

そして今では、メロディーと全然別な伴奏でも立派に歌い上げること、口を大きく開けて歌うこと、強弱をつけて歌うことが出来る。また、私が伴奏を誤って弾いたり省略したりすると、抗議を申し立てる子どもさえ出てきたことは、誠に嬉しい悲鳴である。

（尚絅幼稚園）

私の経験したこと

本城光子

今日もまだ外は寒そうだなと考えながら今出ていった子ども達の後姿に目をやった。子ども達は思いおもいの遊びに入っていった様子、さあ私も早く出て一しょに遊びましょう。部屋の中を手早くまとめて外に出た。「Kちゃんお入りハイ」となわとびをしている子ども、「先生二階のあるお家だよ」とすべり台の上から手をふるH、「ウ〜〜〜ウ〜〜〜」と「ハイウエイパトロール」ごっこの五、六人の男の子が走ってくる。砂場でお山つくりに懸命な子ども達など皆んながそれぞれのグループになって楽しく遊ぶ姿が庭いっぱいに拡がった。その中ではお互いがルールを守ることが身につき、助け合い協力し合うことがごく自然に行なわれている。確かに入園の初めの子ども達には見られなかったものが、その中にある。子ども同志の結びつきが目に見えない世界で何かを生み出している。

二年保育児二十五名、（内男十一名女十四名）のクラスを私が受け持つことに決った四月、まず初めに次のようなことを考えた。それは、初めて集団生活を経験する子ども達の間にどんなにして友達としての結びつきが生まれるのか、それがグループとして発展してゆくとき、リーダーとなる者、服従する者、反撥する者、無関心な者、周辺をうろつく者などの種々の特徴を把み、更に子どもの結びつきをよく理解し、ある時は、保育者の意図を含んだ結びつきをつくり、その中で子ども一人ひとりの個性を生かした保育を考えてゆきたいというこ　ゝある。

四月、五月の混乱の時期が過ぎると、そろそろグループとしてのまとまりらしいものが生まれて来た。男の子の積木あそび、砂遊びなどを中心に、同じメンバーがいつも集まって遊ぶ様子がみられた。女の子の場合は、家の近くの子ども同志が一しょにいるか、または独りで遊んでいるのが多かった。この頃になっても先生の側が離れられず泣いたり、怒ったり、また乱暴したりして友達と遊べなかったり、或いは少しも目立たず独りぼっちになりがちな子どもが何人か出てきた。そこで周辺をうろつくHを通しての私の経験をまとめてみたいと思う。いずれも心身共に特に欠陥はなく家庭的にも恵まれていると言えるがまず子どもの毎日の生活ぶりをよく観察し、同時に次の三点から、問題の行動を考えてゆくことにした。第一にその子ども自身の問題はないか。例えば、身体が弱い、或いは、非常な劣等感を持っているなど。第二に関心を寄せているグループ自体に問題はないか。

自分の嫌いな子どもがその中にいる、或いは人数が多すぎる、または遊び方が活発すぎるなど。第三には家庭生活の影響である。第一、第三の点についての原因は、家庭と話し